

李景亮 「人虎伝」

隴西（ろうせい）の李徵（りちょう）は皇族の子孫であった。虢略（かくりやく）に住んでいた。李徵は若いときから博学で、巧みに詩文を作った。天宝十五年の春、科挙の進士に及第した。その後数年、江南地方の県の下級官吏に選任された。李徵は性格が気ままで人と親しまず、自身の才能を自負して傲慢であった。下級の役人の地位に甘んじることができなかつた。いつも鬱々としていて楽しまなかつた。同じ役所の会合をするたびに宴もたけなわになると、見まわして同僚の役人たちに向かって言う、「私ほどの人間が君たちと仲間になれるだろうか。」彼の同僚たちはみな彼を憎んで見た。

完了の任期が満了すると、官職を退いて世俗との交わりを断つて静かに暮らし、人と交際しないことが一年余りにもなつた。後に生活に困窮し、そのため東の呉楚のあたりを旅し、地方の上級官吏に援助を求めた。李徵が呉楚に滞在して、一年余りになろうとし、もらった贈り物はとても多かつた。西へ向かい虢略へ帰ろうとして、まだ着いてはいなかつた。汝墳の宿屋に泊まつたときに、突然病氣になって発狂した。何も無しで夜中に狂つて走り出し、誰もどこに行ったのか知らなかつた。

翌年になって、陳郡の袁彥（えんさん）が監察御史として、詔を受けて嶺南へ使いをした。馬車に乗つて商於（しょうお）の境界まで来て、早朝に出発しようとした。その宿場の役人がこう言った、「道中には虎がいて、荒っぽくて人を食うことがあります。ですからここを通る者は、昼でなければ通ろうとしません。今はまだ早いです。どうかしばらく車を止めてください。決して進んではいけません。」袁彥は結局馬車を命じて出発した。

出発してまだ一里も行かないうちに、やはり虎がいて、草の中から飛び出してきた。袁彥はとても驚いた。急に虎は身を草の中に隠し、人間の声で言う、「なんということだ。もう少しで我が旧友を傷けるところだった。」袁彥がその声を聞いたところ、李徵に似ていた。袁彥は昔、李徵と同じ時期に進士に及第し、付き合いはとても深かつた。別れて何年もたつていた。突然その言葉を聞いて、驚いたうえに不思議に思つて、理解できなかつた。そこで尋ねた、「あなたは誰なのか。なんと旧友の隴西出身の人ではないか。」虎はうなり声を数回あげ、すすり泣いた。そして、袁彥に向かって言う、「私は李徵である。」そこで袁彥は馬から下りて言う、「君はどういうわけでここにいるのか。」虎が言う、「私が君と別れてから、遠く離れていて会えないことが長かつた。幸いなことに無事であったのかい。役人として出世することは滯りなかつたか。今日はまたどこへ行くのか。」と。袁彥が言う、「最近幸いにも御史の一員になることができた。今は使者として嶺南に行く命を受けたところだ。」虎が言う、「君は文学で身を立て、位は朝廷の高官に登つてゐる。立派であるというべきだ。心より旧友がこの地位にいることをうれしく思う。とてもめでたいことだ。」虎は言う、「私は今や人間ではない。どうして君に会うことが出来ようか。」袁彥が言う、「どうかその事について詳しく話してはくれないか。以前は私と君とは年を同じくして名声を得た。交際の深密さは、普通の友人とは異なる」

る。遠く離れてから、時間が過ぎるのは流れるかのようだった。立派な姿を遠く思いやつて、心と目が断たれるかのようだった。思いもしなかった、今日君から昔を懐かしむ言葉を得られるとは。それなのに君はどうして私に会おうとせず、自ら草木の中に匿れるのか。昔なじみの仲であって、どうしてこのようであるはずがあろうか。」

虎が言う、「私は以前呉や楚で旅をしている者であった。去年家に帰ろうとして、道中で汝墳（じよふん）に宿泊したところ、突然病気になって発狂した。夜に外で私の名前を呼ぶ者があるのを聞いて、そのままその声に応じて外に出て、山や谷の間を走り回った。訳も分からず、左右の手で地面をつかんで歩いていた。この時から心はますます残忍になり、力もますます強くなるのを感じた。自分の肘や股を見ると、毛が生えていた。心の中で非常に不思議に思った。谷川に面したところまで来て自分の姿を照らすと、すでに虎となっていた。しばらくの間、悲しんで声をあげて泣いた。しかし、やはり生き物を捕まえて食べるのは、耐えられないことだった。しばらくして腹が減って我慢できなくなり、そのまま山の中にいるシカやイノシシ、ノロジカ、ウサギなどの野獸を捕まえて食べた。またしばらくすると、獸たちは皆私を遠ざけるようになり、捕まえられる獸がいなくなり、飢えはますますひどくなつた。ある日夫人が、山のふもとを通りかかった。その時ちょうど飢えが限界まで来て、しばしば歩き回ったが、自分を抑えることができず、そのまま捕まえて食べてしまった。特別おいしく感じた。今でもその夫人の髪飾りは、岩の下にある。これ以来、冠をつけて乗り物で行く者、歩いて行く者、荷物を背負って走って行く者、翼があって空を飛ぶもの、毛があって地面を駆けるもの、力の及ぶ限り、すべて捕まえて動きを封じて、すぐに食べ尽くしてしまうのが、ほぼいつものことになっている。妻子や友人のことを思わないわけではない。ただ自分の行いが天地の神にそむいたことで、一旦異獸となってしまったからには、人に対して恥ずかしいばかりだ。だから獸の分際として会うことはできない。」そこで、叫び声をあげ、ため息について嘆き、我慢できなくなつて、そのまま泣いた。

袁巒はさらに尋ねた、「君は今すでに獸となっている。どうしてまだ人間の言葉を使えるのか。」虎が言う、「私は今姿は変わっているが、心ははつきりとしている。ここにいるようになってから、どのくらいの歳月が経過したのか分からぬ。ただ、草や木が生い茂っては枯れるのを見てただけである。近ごろは旅人の通行も絶えて、長い間飢えていて耐え難かった。不幸にも旧友に不意につきあたってしまった。恥じて恐れるばかりだ。」袁巒は言う、「君は長い間飢えている。食物を入れる竹のかごの中に羊の肉が数斤ある。これを君に贈ろうと思うが、どうだろうか。」虎は言う、「私はちょうど今、旧友と昔話をしているので、食う暇がない。君が去るときにそれを置いていってくれ。」そしてさらに言う、「私と君とは本当に外形にとらわれず心で結ばれた友である。私は君に頼みたい事がある。よいだろうか。」と。袁巒は言った、「以前からの旧友だ、どうして断ることがあろうか。残念なことには、まだ何の事か分からぬ。どうか全部それを教えてくれ。」虎が言う、「君が引き受けてくれなければ、私はどうして無理に言うことができようか。君が今引き受けてくれるならば、どうして隠すことがあろうか。私の妻子はまだ號略にいるだろう。どうして私が獸になつてしまつたことなど知っているだろう

か。君が南方から帰ったならば、手紙を持って行って、私の妻子を訪ねてくれ。私はもう死んでしまったとだけ言って、今日のことは言わないでくれ。そのことは決して忘れてくれるな。」虎は続けて言う、「私は人間の世界にいた時、財産がなかった。子供がいるけれどもまだ幼く、言うまでもなく自分の力で生活するのは難しい。君は高官の地位にあり、普段から立派なふるまいをしている。昔からの仲で、どうして他の人間が君に勝れることがあろうか。是非とも父親のいない幼子を心にかけてほしい。時には困窮している子を憐れんで救い、道端に飢えて死ぬことがないようにしてくれたならば、これもまた大きな恩義のだ。」言い終わると、また悲しそうに泣いた。

袁巣もまた泣いて言う、「私と君とは喜びも悲しみも共にする仲だ。それならば君の子はまた私の子でもある。きっと努力して君の懇ろな依頼に沿うようにしよう。どうして私がいいかげんにすることを心配するがあろうか。」虎が言う、「私には以前に作った詩文が数十編ある。まだ世間で読まれていない。残っている原稿はあったとしても、きっとすべてばらばらに散っているはずだ。君が私のために記録してくれ。実を言うと文人たちの噂にならないとしても、それでも子孫に伝わることを重んじている。」袁巣はすぐに従僕を呼んで記録を命じて、虎の言う通りに書き取らせた。二十編近くあった。文章はとても格調高く、内容も非常に深いものだった。読んで感嘆することが、何度もあった。虎が言う、「これは私が以前に行った仕事である。またどうしてそれを途中でやめて、世間に伝えないでいられようか。」やがてまた虎が言う、「私は詩を一編作ろうと思う。思うに、私の外見は人間とは異なるけれども、しかし中身は異なってはいないことを示したい。またそこで私の思いを言って、私の憤りを述べたいと思うのである。」

袁巣はまた役人に命じて、筆で書かせた。その詩は言う、

偶因狂疾成殊類	たまたま狂疾によって異類のものとなった
災患相仍不可逃	災患が次々に押し寄せて逃れることができなかつたのだ
今日爪牙誰敢敵	今日 この爪牙に誰が敢えて歯向かうだろう
當時声跡共相高	あの頃 名声も足跡も 二人ともに高かつたというのに
我為異物蓬茅下	私は 蓬茅の茂る草原に異類のものと為り果てて
君已乘輶氣勢豪	君は 立派な車に乗る高官となつて威風堂々たる勢いだ
此夕溪山対明月	この夕べ 山中の渓谷で明るく輝く月と向き合う
不成長嘯但成嗚	長く嘯（うそぶ）く声にはならず ただ咆哮の声となるばかり

袁巣はこの詩を見て、驚いて言った、「君の才知と品行について、私はよく知っている。しかし君がこんなことになったのは、君が普段から自分自身で残念なことがあるのではないだろうか。」虎が言う、「陰と陽の二つが万物が創造することについては、もともと親疎厚薄の隔たりなどなかつたであろう。その出会う時代や、巡り合う運命などのようなものは、私はまた知るよしもない。ああ、顔回の不幸、冉有の病気などを、かつて孔子は深く嘆いたのだった。もしも自分自身で悔やまれることを振り返って考えるならば、私もまた思い当たることがある。きっとそれに起因するに違ひない。私は旧友に会つたのだ

から、何も隠すことはない。私にはずっと記憶していることがある。南陽の郊外で、かつて夫に先立たれたある女性と密かに交際していた。その家族が密かにその事を知り、私の邪魔をしようと思った。その女性はこういうことが原因で再び会うことができなくなつた。そこで私は風に乗じて火を放ち、その一家数人を全員焼き殺して立ち去つた。このことが残念でならない。」

虎がまた言う、「使者としての仕事を終えて帰る日には、他の郡の道を選んで、二度とこの道を通ってはならない。私は今日は心がはっきりしていたが、いつか完全に酔いしれれば、君がここを過ぎても、もう思い出せず、君を牙でかみ碎こうとし、最後には教養人の仲間で笑い者になるだろう。それを成し遂げて笑うだろう。これは私の切実な願いだ。君が百歩余り先に進み、小山に登つて見下ろしたならば、すべて見尽くせるだろう。そこで君に私の姿を見せようと思う。勇猛さを誇りたいのではなく、君に私を見てもらい、二度とここを通らないようにさせたいと思うからだ。そうすれば、私の旧友に対する待遇が厚かったことを理解するだろう。」

別れの言葉を長い間述べ合つた。袁修はそこで丁寧に挨拶して馬に乗り、草むらの中を見回すと、悲しく泣く声が聞くに耐えられないほど悲しいものだった。袁修もまた大いに嘆き、数里ほど進み、峰に登つて先程までいた辺りを見たところ、虎が林の中から躍り出て大きく吠え、険しい谷すべてを震わせるようだった。